

マズロー自己実現論の経営学における意味 —— フロムの自由論の視点から ——¹⁾

山下 剛

【目次】

1. はじめに
2. マズロー理論と自己実現
 - (1) マズローにおける自己実現の人間
 - (2) マズロー理論における欲求階層説の意味
3. フロム『自由からの逃走』における自由論
4. フロムの自由論から見たマズロー自己実現論の意味
5. おわりに

1. はじめに

自己実現とは何であろうか。現代においてどのような意味をもっているだろうか。

一般に、自己実現という言葉は、「夢をかなえる」「自分の目標を達成する」というニュアンスで用いられることも多い。こうしたことから、利己的なイメージでとらえられることもある。ただし、こうした意味は、自己実現という言葉から連想されるイメージの域を出ない。

自己実現の概念は、A.H. マズローの欲求階層説によって有名なものとなり、D. マグレガーらによって経営学にもたらされることとなった。以降、マズローの理論は、経営学、とりわけ組織行動論、マイクロ組織論と呼ばれる領域で、ほぼ必ず紹介される理論と言っている。そこにおいて、マズロー理論はモチベーション論として位置づけられて、彼の欲求階層説が紹介され、その欲求階層の頂点にある自己実現について言及される。欲求階層説と自己実現の人間の2つは、マズロー理論の核である。欲求階層説については、非常に豊富な実証分析がある。その結果、現在は、欲求階層説は妥当性がないというのがほぼ通説となっている。自己実現の人間については、近年まで、それほど十分に研究がなされてきたとは言い難い。

マズロー理論が経営学に導入された当初は、マズロー理論の現代的意義ははっきりしていた。すなわち、現代はすでに人々の低次欲求が充足されている時代であり、高次欲求、とりわけ自

1) 本稿は、2014年9月8・9日に開催された経営哲学学会全国大会(於東京富士大学)での自由論題報告(山下剛「マズロー自己実現論の意味」と、2014年12月20日に開催された日本経営学会九州部会例会(於北九州市立大学)での報告(山下剛「マズロー理論と「自己実現」—その経営学における意義—」)を基にしつつ、それらの二報告では紙幅の都合上触れることのできなかった部分、特にフロムの自由論について大幅に加筆したものである。

己実現の欲求に注目すべきだというのである。しかし、今や、さまざまな実証分析の結果から欲求階層説は妥当性がないことが通説となっている (e. g. 田尾, 1991; Kanfer, 1995; Robbins, 1996; Locke, 2008)。代わりに、実証分析を経てより妥当性のあることが確認されたアルダファーの ERG 理論 (Alderfer, 1972) などに取り上げられるようになってきた。自己実現の「欲求」は、そもそもマズロー自身があまり多くの分析をしてこなかったために、その後現れてきた達成動機や内発的動機づけの理論が注目されることとなり、さらに近年、自己実現欲求は動機づけることができないということが指摘されることとなって (e. g. 金井, 2001)、自己実現ではなく承認欲求に注目すべきだという議論も出てきた (e. g. 沼上, 2003; 太田, 2005)。

以上のようなマズロー理論を取り巻く現状を見ると、マズロー理論はもはや現代的な意義を有していないようにすら見えるし、自己実現という問題も現代においては重要でないように見える。はたして、そうであろうか。

マズロー理論は経営学において「モチベーション論」と位置づけられる。上に述べたマズロー理論をめぐる評価もこのモチベーション論としてのマズロー理論の評価である。モチベーション論として評価した場合、こうした評価はまったくその通りである。では、モチベーション論として役に立たないなら、マズロー理論は役に立たないのであろうか。私は、「Maslow 理論はモチベーション論か」(『日本経営学会誌』第 22 号, 2008 年) で述べたように、マズロー理論はそもそもモチベーション論ではないと考えている。マズロー理論は、モチベーション論としての意義以上の重要な意義を有しているものと考えられる。そして、このことは、自己実現がモチベーションとは異なる意味で重要性をもっているということの意味する。

このマズローの理論の意義を見極める上で採り上げたいのが E. フロムの自由論である。本稿では、マズローの自己実現的人間の概念、欲求階層説について改めてその全体像を捉えなおした上で、E. フロムの『自由からの逃走』とマズロー理論との関係性に注目したい。この二つの理論は重要な点で符合を見せる。そのことは、マズロー自己実現論の現代における意味を明らかにするものと思われる。

2. マズロー理論と自己実現

マズロー理論とは何であろうか。一般には、モチベーション論とされるが、そうではないと考えられる。

マズロー理論の意図は、彼の論文「心理学の哲学」(1957)において明確に知ることができる。その論文の冒頭では次のことが述べられている。すなわち、世界が救われるかどうかは心理学にかかっている。心理学が心を傾けるべき究極の目的は、人間的充実、人間的向上、成長、および幸せである。なぜなら、どんな知識も、よい者の手にかかればよいもの望ましいものとなり、悪い者の手にかかれば悪いものとなるからである。よい人間を生み出すために、善とは何であり悪とは何であるか、心理的健康とは何であり心理的不健康とは何であるかを理解しなければならない。これこそが心理学者の仕事である (Maslow, 1957, pp. 225-226)。また、以上のようなことが述べられた上で、心理学者は「健康を育む文化 (the health-forstoring culture)」の創造という課題に向かうべきであるということも指摘されている (Maslow, 1957, p. 243)²⁾。

2) 以下、引用に際して、訳書のあるものは訳書を参照している。ただし、訳語は必ずしも訳書にしたがっていない。引用ページは原文のページのみを示した。

つまり、マズローがその理論全体において志向していたのは、よい人間＝心理的に健康な人間をいかに育むかということである。彼がこのように考えたのは、このような人間を生み出すことができるかどうかにか世界を含めた社会の行く末がかかっていると見たからである。彼が関心をもっていたのは、単に一人の個人が心理的に健康になるということではなく、社会全体において、それぞれの諸個人が心理的に健康になるということであった。したがって、上述の通り、マズローは、健康を育む文化の創造という課題に言及することになり、後には、現代社会の「無価値状態 (valuelessness)」を嘆いて、『ユーサイキアン・マネジメント (Eupsychian Management)』 (1965年) で組織論を論じることにもなったのである³⁾。

すなわち、一言で言えば、諸個人の心理的健康の実現こそがマズロー理論の根本的な問題意識であった。そして、このゆえにこそ、マズローは欲求階層説と自己実現的人間について語ったのだと考えることができる。

この観点からすると、欲求階層説と自己実現的人間論、この2つの理論の関係性に注目しなければならない。モチベーションの観点からすれば、それらはいずれもモチベーションの内容論として位置づけられる。しかし、マズロー理論にあって、この2つの理論は別々の役割が与えられていると言っていい。両者は、その一側面として、目的と手段の関係性にある⁴⁾。自己実現、自己実現的人間とは、マズロー理論の中で「理想」としての位置を占めている。つまり、自己実現欲求の段階に至ること、自己実現的人間になることが、到達すべきマズロー理論の目的である⁵⁾。その目的を実現するには、その目的の中身を十分に理解していなければならない。このことは、モチベーション論が自らを「人間行動の方向づけ、強度、持続性を説明し、コントロールすること」と規定したとき (e.g. Campbell & Pritchard, 1976; Kanfer, 1995; Locke & Latham, 2004)、はじめてそれらをどのように実現するかが議論できることと同じである。

これに対して、欲求階層説とは、その目的たる自己実現に至る経路、つまり「手段」としての位置づけを有している。これは、「内容論」というよりは、まさしく「過程論」と呼ぶに相応しいものである。欲求階層説を、自己実現に至る一つの経路を説明するものであり、一つの手段を説明するものであると位置づけると、マズロー理論の理解はさらに広がる。欲求階層説がマズロー理論の中で相対化されるからである。

以下では、自己実現的人間、欲求階層説それぞれの中身について概観しておこう。

(1) マズローにおける自己実現的人間

モチベーション論においては、マズローの「自己実現的人間」はほとんど取り上げられることがない。モチベーション論の立場からすれば、自己実現的人間はいかなる欲求をもつかが問われることになるが、実は、マズローの文献を読んでも、その解を得ることはほとんどできないからである。あえて言えば、存在価値 (B 価値, the values of Being, the B-Values) がそ

3) この点の詳細は、山下 (2011) および山下 (2012) を参照。

4) ただし、「目的と手段」という表現も必ずしも適切とは言えない。この考え方は、C.I. バーナードの「戦略的要因と補完的要因」という発想につながっていくものであり、目的・手段連関に関わる要因＝戦略的要因以外は、補完的要因として重視しないこととなるからである。

5) 先述のとおり、マズローは積極的に「価値」を論じようとした。それは現代社会における「無価値状態 (valuelessness)」に危機感を抱いていたからである (e.g. Maslow, 1959)。

の解となるが、存在価値は、外部から動機づけるための概念ではないために、モチベーション論の立場からは益がない。マズローの自己実現的人間論の研究が、彼の欲求階層説の研究に比してきわめて少ないのはこのためである。マズロー理論から得られなかった解が、「達成動機」や「内発的動機づけ」の理論によって得られ、これらの理論に研究の焦点が移っていったと見ることができるであろう。

しかし、実は、その自己実現的人間の理論が重要である。なぜなら、その理論こそがマズロー理論の目的たる心理的健康とは何かを語るものだからである。

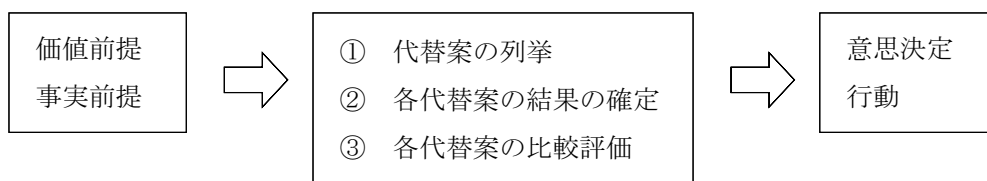
心理的健康とは何か。マズローは次のように述べている。「精神的健康 (mental health) の理論を得ようとするならば、精神外の成功 (extra-psychoic success) では十分ではない。われわれは、精神内の健康 (intra-psychoic health) をも含めて考えなければならない」 (Maslow, 1962, p. 169)。すなわち、諸個人の心理的健康を評価するには二つの側面があると言える。第一に、個人の外部環境との関係がうまくいっているかどうかであり、第二に、個人の内面が調和がとれているかどうかである。

このように心理的健康をとらえることは何を意味しているだろうか。自己実現＝心理的健康とは、個人的な満足のことではない。それは言ってみれば、「すぐれた意思決定者」となることを意味していると言える。事実、マズローは、「健康な人々は、不健康な人々よりよい選択者 (better choosers) である」と述べている (Maslow, 1962, p. 159)。

意思決定と言えば、まず何よりも H.A. サイモンの意思決定論が想起されるであろう。もちろん、マズローにはサイモンを読んだ形跡はない。しかし、マズローの自己実現の分析は、ある意味でサイモンの意思決定論に即して考えることができる。意思決定とは、サイモン (1947) によって理解すると、次のような特徴をもつと言える。

- ① 意思決定の前提として、価値前提・事実前提がある。
- ② この意思決定前提を材料として、代替案の列举、各代替案の結果の確定、各代替案の比較評価が行われ、一つの代替案が選択される。

図表 1：サイモンの意思決定過程



(出所) Simon (1947) より筆者作成

意思決定をこのように考えたとき、重要なのは、意思決定の前提である。すなわち、どのような価値前提に立ち、どのような事実前提を得るかということが、どのような意思決定を下すかということの基礎となるからである。

自己実現的人間は、どのような価値と事実に基づいて意思決定するか。それは、マズローによ

れば、存在価値（B価値，the values of Being, the B-Values）と存在認識（B認識，Cognition of Being, B-cognition）である。そして、この両者のうち、より根本的なものは存在認識であるということができる。順に見ていこう。

まず、自己実現的人間は、存在認識の下に行動する。存在認識という言葉自体は、例えば、マズローの最も有名な著書『動機と人格』（1954年）には出てきていないが、この段階から考え方は変わっていない。すなわち、マズローは、自己実現的人間の特性として、「現実のより有効な知覚とそれとのより快適な関係」や「自己・他者・自然の受容」を掲げ、「問題中心的」であるということを描いているからである。存在認識の特徴は、『存在心理学に向けて (Toward a Psychology of Being)』（1962年）によって様々なものが挙げられているが（e. g. Maslow, 1962, pp. 70-91）、一言で言えば、それは、存在全体（the whole of Being）の認識にある。その意味は、認識される対象が、それに関連する他のあらゆるものとともに注意が払われ、世界の一部として世界における他のすべてのものとの関係性に埋め込まれているとみなされるということである（Maslow, 1962, p. 70）。そうした認識は、相対的に、自我超越的、自己忘却的、無我的なものである（Maslow, 1962, p. 74）。また、そうした認識は、能動的というよりも受動的（passive）で、受容的な（receptive）ものであって、それは道教的な言葉で言えば、「無為（let be）」である（Maslow, 1962, p. 81）⁶⁾。さらには、存在認識においては、対象のあらゆる側面や性質を同時に認識するという意味で、具体的な認識がなされる（Maslow, 1962, p. 84）。存在の全体を理解すればするほど、われわれは、不調和、反対物、矛盾が同時に存在すること、それらを同時に認識することを許容することができるようになる（Maslow, 1962, p. 86）。

マズローによれば、これらは欠乏認識（D認識，D-cognition）⁷⁾とは対照的なものである。「欠乏認識は基本的欲求あるいは欠乏欲求と、それらの満足、不満足の見地から組織される認識として規定することができる。つまり、欠乏認識は利己的認識と呼ばれうるもので、そこでは、世界はわれわれのもつ欲求を満足させてくれるものと満足させないものとで組織されており、それ以外の特徴は無視されたり、軽視されたりする。対象の欲求満足的あるいは欲求不満足的性質に言及することなく、つまりは、観察者にとってのその対象の価値、観察者へのその対象の効果に真っ先に言及することなく、それ自身の正しさ（right）、それ自身の存在（Being）をもってする対象認識は、存在認識（あるいは、自己超越的認識、非利己的認識、客観的認識）と呼ばれうる」（Maslow, 1962, p. 189）。

以上の意味において、存在認識は、「現実の最も純粋で、最も効果的な認識」であり、それは、「たいていとらわれがなく、客観的で、認識する者の願望や恐れや欲求によって汚されていることがすくないので、対象のより正しい、より事実と一致した認識である」（Maslow, 1971, p. 167）。そして、「認識されたものが、より個性的なものとなり、一体化され、統合され、よ

6) 『道教学典』（野口鐵郎・坂出祥伸・福井文雅・山田利明編、平河出版社、1994年）によると、「無為」の意味は『老子』と『莊子』では意味が異なるようだが、『莊子』の「無為」の意味として、それは「心のあり方の無為」であり、「それは自我（主體的な思慮分別）を捨て、心を虚しくしておかれている状況に身を委ねることであって、人はこれによってあらゆる束縛から解放され、まことの意味での心の安らぎを得る、と説く」とされる（566頁）。これは、マズローの言う存在認識の極致であると考えられる。したがって、ここではlet meを「無為」とした。

7) ここでのD-cognitionのDとは、DeficiencyのDである（Maslow, 1962, p. 189）。

り享受でき豊かなものになると、同時に、認識している人間は、よりいきいきとし、より統合され、一体化され、より豊かな心を持ち、より健康となる」とされるのである (Maslow, 1971, p. 167)。

この存在認識がある場合、人は、存在価値の下に行動するようになる。マズローによれば、この両者は表裏一体である。マズローは次のように述べている。

「事実と価値は、ほとんどいつでも (と言っても、知識人によってだが)、反意語であり、相互に相容れないものと考えられてきた。しかし、おそらく、その反対が正しい。というのは、われわれがもっとも自我の独立した、客観的な、無動機の、受け身的な認識を調査する場合、次のことを見出すからである。すなわち、そうした認識は、直接的に諸々の価値を認識することを要求するという、諸々の価値は現実から切り離すことができないということ、「事実」の最も深遠な認識は、「である (is)」と「べし (ought)」を溶融させるということを見出すのである。これらの瞬間において、現実には、驚き、感嘆、畏敬の念、是認に、つまりは、価値に染められている。」 (Maslow, 1962, p. 79)

マズローがこうした価値を the Value of Being と呼ぶのも、この事実と価値の関係性についての考え方が背景にあると考えられる。

マズローによって挙げられた存在価値は、列挙すれば、次のものである (Maslow, 1971, pp. 318-319)。①真理 (Truth)、②善 (Goodness)、③美 (Beauty)、④まとまり (Unity)・総体 (Wholeness)、④ A. 二分化の超越 (Dichotomy-Transcendence)、⑤生きていること (Aliveness)・過程 (Process)、⑥独自性 (Uniqueness)、⑦完全性 (Perfection)、⑦ A. 必然性 (Necessity)、⑧完成 (Completion)・最終状態 (Finality)、⑨公正 (Justice)、⑨ A. 秩序 (Order)、⑩単純さ (Simplicity)、⑪豊かさ (Richness)・全体性 (Totality)・包括性 (Comprehensive)、⑫自然さ (Effortlessness)、⑬遊び心 (Playfulness)、⑭自立 (Self-sufficiency)、⑮有意味さ (Meaningfulness)。

これらの価値は、個々バラバラなものではなく、一体のものである。次のように述べられる。

「私の (不確実な) 印象だが、何らかの存在価値は、他の諸々の存在価値の全体によって十分かつ的確に定義される。すなわち、真理が十分かつ完全に定義される場合には、それは、美しく、良く、完全で、公正で、単純で、秩序立っており、合法的であり、生き生きしており、包括的で、まとまりがあり、二分化を超越しており、自然で、面白いものでなければならない」 (Maslow, 1971, p. 324)。

さて、大事なことは、自己実現の人間は、これらの価値をもっているだけでなく、これらの価値に突き動かされているということである。

「存在価値は、われわれにある種の〈求められているという感覚 (requiredness feeling)〉を引き起こし、まだまだその価値に達していないという感覚 (a feeling of unworthiness) を引き起こす」 (Maslow, 1971, p. 334)。

以上の存在認識と存在価値を有するという一つの意味は、「統合」する能力にあるとすることができる。「よい」とはいかなる状態であるかを考えるための一つの方法は、「悪い」状態がどのような状態かを考えることである。マズローは、「悪い」状態、つまり精神病理の発生について、脅威をもたらす欲求不満 (frustration) と対立・葛藤 (conflict) にその原因を

求めている (Maslow, 1954, p. 158, p. 160)。対立・葛藤はさまざまな事実、価値のうち重要なものについて、それらが相容れないという認識をもつことだと言える。

これに対して、「よい」状態、つまり健康については、次のように述べられている。

「これらのあらゆる〈対立物 (opposites)〉は、実際には、より健康な人々においては、階層的に統合される。そして、治療の正しい目標の一つは、表面的には両立しない対立物を二分化したり分割したりすることから、それらを統合することに向けて進むことである」 (Maslow, 1962, p. 164)。

もちろん、これはあらゆる対立を克服しているということではない。

「自己実現は、あらゆる人間の諸問題を超越しているということの意味しているのではない。対立・葛藤、心配、欲求不満、悲しみ、精神的苦痛、罪悪感はずべて、健康な人間においても見出しうる。一般に、成熟度が高まるにしたがって、そうした諸問題の性質は変化し、神経症的な偽りの問題から本物の、避けられない、実存的な問題に変わっていく。」 (Maslow, 1962, p. 196)⁸⁾。

かくして、マズローは、「統合 (integration) は、心理的健康を定義づける一つの側面である」と述べるに至る (Maslow, 1971, p. 166)。

存在認識や存在価値をもつということは、多様な事実を受け入れ、多様な価値を受け入れることを意味する。それは、さらに言うと、それらの認識、価値が意思決定に反映しているということである。逆に、意思決定に反映されていないならば、どれだけ頭の中に存在認識や存在価値をもっているとしても、実質的にはもっているとは言えない。存在認識・存在価値を実質的にもっていると言えるためには、したがって、それらを実際の行動に移していくためには統合する力が必要である。

自己実現的人間とは、以上の意味で、「すぐれた意思決定者」たることを意味している。このような状態であるとき、人間は二つの意味ですぐれた意思決定を行うことができると言える。すなわち、第一に、外部環境との関係性において機能的な意味ですぐれた意思決定を行うということであり、第二に、個人の内面における深刻な対立・葛藤が解消され、調和が存在しているという意味で、その人間の個人的な意味ですぐれた意思決定を行うということである。

(2) マズロー理論における欲求階層説の意味

自己実現的人間とは、心理的に最も健康な人間である。ただし、マズローは、そうした人間の分析にとどまらず、そうした自己実現の段階にどのようにして諸個人を導いていくかをも問題とした。すなわち、マズロー理論には、自己実現の方法に関する理論が存在する。そのうち最も知られているものが彼の欲求階層説である。

8) ここでの言説は、コンフリクトとその統合について論じた M.P. フォレットの言葉を想起させる。例えば、次のように述べている。

「心理学は「累進的に統合すること (progressive integratings)」という言葉がわれわれに与えてくれたが、同じように、累進的に相違すること (progressive differings)」という言葉も必要である。われわれは、しばしば、対立の性質を見ることによって進歩の程度を測定することができる。この点では社会的進歩も個人の進歩と似ている。われわれの争いがより高い水準上へ行くにつれて、われわれも精神的にますます高い水準へと発展して行く。」 (Follett, 1941, p. 35 訳書、49-50 頁)

欲求階層説は、例えば、ロビンス『組織行動 第7版』では、次のように説明される (Robbins, 1996, pp. 213-214)。

第一に、すべての人間の中には、生理的 (physiological)、安全 (safety)、社会的 (social)、尊敬 (esteem)、自己実現 (self-actualization) の5つの欲求の階層がある。この5つの中身は次のとおりである。

- ① 生理的：空腹、のどの渇き、住まい、性欲、その他身体的欲求を含む。
- ② 安全：物的、感情的な危害からの防護・保護を含む。
- ③ 社会的：愛情 (affection)、所属、受容、および友人関係を含む。
- ④ 承認：自尊 (self-respect)、自由裁量、および達成のような内的な承認の要素と、地位、評価、配慮のような外的な承認の要素とを含む。
- ⑤ 自己実現：人がなりうるものになる (become what one is capable of becoming) ための動因。成長、その人の潜在的なものの実現、自己充実を含む。

第二に、これらの欲求の各々は、大体において満たされると、次の欲求が支配的となる。個人は欲求の階層の段階を登っていく。第三に、欲求が十分に満たされていないとしても、大体において満たされていれば、その欲求はもはや動機づけとならない。第四に、それゆえもし誰かを動機づけたいなら、その人が現在階層のどのレベルにいるかを理解し、そのレベルがそれ以上の欲求を満たすことに焦点を合わせる必要がある。第五に、5つの欲求は、高次 (自己実現、承認、社会的) と低次 (安全、生理的) に分けることができ、高次欲求は内的に (その人間内で) 満たされ、それに対して、低次欲求は外的に (給料、組合契約、終身的地位によって) 満たされる。第六に、ただし、Maslow 理論には実証的支持がない。

以上の欲求階層説の理解は、基本的に、まったく正しい。ただし、いくつか注意すべき点もある。まず第一に、なぜマズローが欲求に注目したかである。ロビンスは言及していないが、それは欲求が人間のさまざまな性格構造を規定すると考えたからである。例えば、マズローは「空腹」について次のように述べている。

「個人が空腹であるとき、その人は胃腸の機能面において変化するばかりではなく、多くのもの、おそらく彼のもつ多くの他の機能面においてさえ変化がある。彼の認識が変化する (彼は、他のときに認識するよりもすばやく食べ物を認識するだろう)。彼の記憶が変化する (彼は他のときに記憶するよりも食事のおいしさをより記憶する傾向があるだろう)。彼の感情が変化する (彼は他のときよりも張りつめており、神経質になっている)。彼の思考内容が変化する (彼は、代数の問題を解くよりも、食べ物を得ることを考える傾向がある)。そして、このリストは、ほとんどすべての身体的・精神的な才能、能力、あるいは機能に拡張されうる」 (Maslow, 1954, pp. 63-64)。

第二に、この5つの階層のうち、「社会的」とされている欲求は、実際には、「所属と愛 (belongingness and love) の欲求」であることを断わっておく必要がある。この愛は、愛情 (affection) とは必ずしも同じではない。マズローは、見逃されるべきでない事実として、「愛の欲求は、愛を与えること、そして愛を受け入れることの両方を必然的に伴う」と述べている (Maslow, 1954, p. 90, 傍点は原文のイタリック表記。以下同)。

第三に、ここで示されている自己実現の欲求の表現は正しいが、未だ、一般的に考えられて

いるような「夢をかなえる」「個人的になりたいものになる」ということと誤解されかねない表現でもある。マズローは、自己実現の欲求について、「人は何でありうるか、何でなければならないか (what a man can be, he must be)。この欲求をわれわれは自己実現と呼ぶ」と述べ (Maslow, 1954, p. 91)、そしてその上で、「その人がそうでありうるものに (what one is) ならうとする」、「その人がなりうるあらゆるものにならうとする (to become everything that one is capable of becoming)」という願望だと説明している (Maslow, 1954, p. 92)。したがって、自己実現とは「なりたくないものになる」ということではない。「本来的にそうであるところのものになる」ということであり、既に述べたように存在 (be) に根ざしたものである。

最後に、この5つの欲求が移行していくとマズローが把握した理由が重要である。ロビンズによって触れられていないことのうちで最も重要なことは、欲求階層説の意図は、人々が自己実現＝心理的健康に至るための経路を示すことにあるということである。このことは二つのことを意味している。まず第一に、自己実現が存在認識・存在価値を得ることを意味していたことから考えると、欲求階層説は、人間がいかなる存在であるかを表すものである。第二に、この欲求階層説の背後には、諸個人が心理的健康に向かう論理がある。

まず第一の点について見よう。上述した通り、自己実現の根本は存在の認識にある。では、人間はどのように存在しているのか。まず何よりも、5つの基本的欲求の階層は、人間の存在のあり方を示している。人間には数えきれないほどの欲求が存在する。しかし、その中で基本的な欲求としてマズローが挙げたのが、生理・安全・所属と愛・承認・自己実現の各欲求であった。これらの欲求が階層をなしていると言うとき、それが意味することは、そこに「低次」と「高次」の区別があるということである。存在を認識するとは、とらわれのない客観的な事実認識をするということであった。それは一つには、利己的な願望にとらわれなくなるということの意味する。欲求の5つの階層はそのとらわれが徐々に取り払われていくプロセスを描いている。すなわち、低次の欲求から高次の欲求へ進むということは、生理、安全という個人的・利己的な欲求から、所属と愛、承認という他者の重要性を認識させる欲求へと進むということである。ここには、人間は、個的な存在であると同時に社会的存在であるという仮定が背後にあることになる。さらに、自己実現は承認以下の欲求とはまた別の次元の欲求である。人間以外の動物も個的存在であり、社会的存在ではある。しかし、人間以外の動物はそのことを意識的に認識しているわけではない。これに対して、自己実現とは、存在認識に立つものであり、こうした個的であると同時に社会的な存在としての人間を意識的に認識し行動するというものである。つまり、人間は、他の動物のように身体的存在であると同時に、他の動物とは異なって精神的存在でもあるということの意味している。このように、自己実現とは他の動物とは異なる人間固有の欲求である。こうして、欲求階層説は、個的・社会的・身体的・精神的というトータルな人間存在を仮定して打ち立てられているのである (図表2)。したがって、マズローもこの欲求階層説について、「この理論は、より低次の、おそらくより単純な動物よりもむしろ、人間存在に立って議論を始める」と述べている (Maslow 1954: 103)⁹⁾。

9) 存在を認識するという事は、「経験する」ということであるが、M.P. フォレットもその著 *Creative Experience*(1924) で「経験」について、まず第一に、「私」の行動とは、私とあなたの関係づけ (relating) に対する応答であるということ、第二に、身体的に「知覚されたもの (percept)」と思考を経て得られる「概念 (concept)」の両面を捉える必要性のあることを語っている。この認識に立って現実を捉え、コンフリクトを統合していくことについて語っているのである。ここでも、第一の点は、個的であると同時に社会的存在としての人間、第二の点は、身体的であると同時に精神的存在としての人間を描いているものと考えられるであろう。

図表 2 : 欲求階層説の意味

	基本的欲求	欲求の特徴	背後に仮定される人間存在	
高次 ↑ ↓ 低次	自己実現	人間存在の認識		精神的存在 (人間固有)
	承認	他者の重要性を認識させる欲求	社会的存在	
	所属と愛			
	安全	個人的・利己的欲求	個的存在	身体的存在
	生理			

(出所) 筆者作成

次に、欲求階層説の背後にある心理的健康に向かう論理についてである。まず、人々が自己実現＝心理的健康の段階に至ろうとすると、何がそれを邪魔するのであろうか。自己実現への障害とは何なのか。上述した精神病理の発生をもたらすものがまさにそれである。すなわち、欲求不満、対立・葛藤がもたらす「脅威 (threat)」である。それは個人に「恐れ (fear)」を抱かせる。つまり、マズローは端的に言って、自己実現への障害を「脅威」とその脅威に対する「恐れ」にあると考えているのである。脅威について、マズローは次のように説明している。

「われわれは、もちろん、脅威の最も中心的な側面をも語らねばならない。つまり、基本的欲求に対する直接的な剥奪、妨害、もしくは危険性——屈辱、拒絶、孤独、威信の喪失、強さの喪失——、これらはすべて、直接的に脅威を与える。加えて、能力の誤用や未使用は自己実現を直接的に脅かす。最後に、メタ欲求や存在欲求は高度に成熟した人間に対して脅威を与える。

われわれは、次のように述べることによって要約する。すなわち、一般に、次のようなものすべてがわれわれの意味における脅威として感じられるのである。それは、基本的欲求やメタ欲求（自己実現を含む）あるいは、それらの欲求の実現を支えている状況が妨害される危険性もしくは実際に妨害されること、人生それ自身に対する脅威、有機体の全般的な統合に対する脅威、有機体の統合に対する脅威、有機体の世界の基本的な支配に対する脅威、そして、究極的な価値に対する脅威、である」 (Maslow, 1970, p. 111)¹⁰⁾。

こうした脅威を取り去り、恐れを取り除くことが自己実現につながっていく。そのときに、何が必要か。マズローの一つの答えは、欠乏を満たすということであった。基本的欲求の欠乏が諸個人にとっての脅威であり、恐れのもとであるならば、それらの欠乏しているものを満たせば、脅威とそれに対する恐れは消失するであろう。例えば、安全性は、それが確かめられる

10) 以下、*Motivation and Personality*からの引用については、第2版においても変更のないところは基本的に第1版から引用し、変更がありその変更を反映させる必要があると思われる箇所は第2版より引用している。ただし、第1版と第2版でマズローに根本的な考え方の変更があったとは考えていない。微調整されているという認識である。

と安心してより高次の欲求や衝動を発現させることができる。マズローは、よちよち歩きの子供が母親の膝から未知の環境に乗り出していくことをその例として示している (Maslow, 1962, p. 46)。また、ときに人は、自分自身のことについて、その感情、衝動、記憶、能力、等々について知ることを恐れるが、そうした恐れは、自分の自尊心を守ろうとすることであり、自分自身に対する愛や尊敬を守ろうとすることであるとマズローは言う (Maslow, 1962, p. 57)。つまり、愛や自尊の欲求が自分自身を知ることに対する恐れを生み、自己実現へと向かう障害となっているとすることができる。したがって、こうした脅威と恐れが一つ一つなくなっていけば、人間の精神は健全に機能するようになっていく。つまり、心理的に健康になる。これが欲求階層説というアイデアに他ならない。

この欲求階層説というアイデアの根本にあるのは、欲求充足による学習である。マズローは、欲求階層説に従って、欲求充足の効果として、まずはより高次の欲求が発現すると指摘し、その上で、その副次的な結果として、関心・価値の変化が生じるといこと、認知的能力における変化が生じるといこと、新たに得られる関心・価値はより高次のものであること、そして、それが真の意味での欲求充足である限りは、それは性格形成に役立ち、個人が健康な成長に向かうということが指摘される (Maslow, 1954, pp. 108-109)。この最後に指摘した真の意味での欲求充足とは、マズローの言う基本的欲求を充足するということであり、人間にとって欲求は無数にあるが、基本的欲求以外の欲求を満たしても、性格形成、心理的健康にはつながらない。

欲求充足には、こうしたその充足自体による学習の効果と同時に、欲求を充足しようとするがゆえに生じる学習の効果がある。マズローは基本的欲求の階層の他に、知りたいという願望と理解したいという願望 (desires to know and to understand) の階層が存在し¹¹⁾、この「基本的欲求の階層」と「知り・理解する願望の階層」は共働 (synergic) していると述べる (Maslow, 1954, p.97)。基本的欲求のうちのそれぞれの欲求は、それを充足することを求める。充足しようとするれば、そのことに関するさまざまな事実を知らねばならない。最初は、「知る」だけであるが、知ることによって、微に入り細に入り知りたくなる、つまりその対象を「理解」しようとするようになる。つまり、このようにして「知る」と「理解する」は階層をなしている。そして、このように知り、理解することによって、それぞれの基本的欲求の充足方法も見出されることとなる。つまり、両階層は相互作用し、共働しているのであり、欲求

図表 3 : 2つの階層の共働

基本的欲求	知り・理解する願望
自己実現	理解する
	知る
承認	理解する
	知る
所属と愛	理解する
	知る
安全	理解する
	知る
生理	理解する
	知る

(出所) Maslow (1954) より筆者作成

11) さらに付言すると、マズローは、審美的欲求 (aesthetic needs) にも言及している (Maslow 1954: 97-98)。ただし、この欲求が基本的欲求や知る願望・理解する願望とどういう関係にあるのかは、少なくとも『動機と人格』(1954年)では明言されていない。

充足にはこの意味での学習効果もあるのである（図表3）。

マズローが考えるのは、いわゆるモチベーション論ではない。したがって、彼は、「何らかの学習の定義が、単に、刺激と反応の間の結びつきにおける変化を強調するならば、それは不十分である」とする（Maslow, 1954, p. 110）。そして、「行動よりもむしろ性格構造をその中心点としておく、性格の学習」について語る（Maslow, 1954, p. 111）。このように、欲求充足とより高次の性格形成、健康な成長との関係性を語ろうとするがゆえに、『動機と人格』の第二版においては、欲求充足によってもたらされる病理に言及することになる。すなわち、物質的な豊かさがもたらす病理、さらには、心理的豊かさがもたらす病理があるとし、「単に基本的欲求を充足するだけでは不十分であり、子どもには、断固としていること、粘り強さ、欲求不満、規律、および我慢の限界をともなういくつかの経験もまた必要とされる」と指摘するに至るのである（Maslow, 1970, p. 71）。

しかし、基本的欲求にかかわる脅威と恐れがなくなれば心理的健康に向かうというマズローの理論からすると、欲求充足は手段の一つでしかない。マズロー理論の骨格からすれば、大事なことは、欲求充足ではなく、脅威と恐れを取り除くことであり、そのとき、当然ながら、その手段は、欲求充足以外にも求めることが可能だからである。したがって、マズローは、例えば、表出療法（uncovering therapy）を取り上げ¹²⁾、評価しているし（Maslow, 1962, p. 166）、教育について、彼が本来的な教育（intrinsic education）と呼ぶアイデンティティの教育の必要性を訴えているし（Maslow, 1971, p. 178）、企業をはじめとする組織にも自己実現の機会があることを見出したのである（e. g. Maslow, 1965）。ここで、その詳細を取り上げることはしない。重要なことは、欲求階層説は、単なる欲求の類型論ではないということ、すなわち、第一に、それは、個的・社会的・身体的・精神的なトータルな人間存在の把握を背景としてもっているものであり、第二に、それは、自己実現に至る経路として示されたということ、そして、あくまでもそのうちの一つとして示されたのだということである。

3. フロム『自由からの逃走』における自由論

さて、以上のようなマズロー自己実現論はどのような位置づけをもつと考えられるであろうか。この問題を考えるために、ひとまず、E. フロムの自由論、特に『自由からの逃走』（1941年）における自由論を概観しておきたい。ここで、フロムの著作の中でも、『自由からの逃走』を取り上げるのは、それが名実ともに彼の名著と言えるからである。すなわち、同書が彼の著作の中で、最も有名であると同時に、彼の他の著作の根本的な問題意識を示しており、彼自身がまた同書を、ナチス全体主義だけでなく、その点を越えて社会全体に広がりつつある全体主義の問題を問おうとしていたからである。

フロムとマズローの関係性は深いものがある。マズローは、フロムの名前をたびたび出しており¹³⁾、フロムから大いに学んでいたことを窺わせる。実際に、ホフマンによると、フロムの

12) 小此木啓吾編集代表『精神分析事典』（岩崎学術出版社、2002年）では、expressive therapy もしくは uncovering therapy の訳語として「表出療法」が挙げられ、次のように説明される。「表現的あるいは探索的療法ともいう。精神分析がその典型であるが、広くは、分析的原則に基づいた精神療法一般を指す。患者が自分自身の心をできるだけ言葉で表現できるように助けることを目的とする。」（413頁）

13) 例えば、マズローが経営を論じ、ドロッカーを評価する際に次のように述べている。「ドロッカーは、カール・ロジャーズやエーリッヒ・フロムが到達した人間の本性の理解とはほぼ同様の理解に達している。」（Maslow, 1965, p. 2）

『自由からの逃走』の議論の筋道はマズローにとって説得力のあるものであり、したがってマズローは1940年代を通じて、フロムの研究を繰り返し引用してパーソナリティや政治的態度についての諸作品を展開させたと述べられている (Hoffman, 1988, p. 102)。そして、実際に、後で見ると、マズロー欲求階層説の構造とフロムの自由論の枠組みは非常に近似したものをもっている。

フロムの『自由からの逃走』は、ホフマンによれば、次のような内容をもっている。

「フロムは、『自由からの逃走』において、さらに幅広く次のようなことを議論した。自由——すなわち、その人自身のために考え、何ものにも妨げられていないその人自身を表現すること——に対する近代個人の苦闘は、必然的に、不安を創出し、不安に怯えさせることさえする。というのは、自由は、世界の中における人の究極的な孤独さと向き合うことを必然的に伴うからである。そのような不安は、多くの人々をして戦いに向かわせることはない。その代わりに、そうした人々は、盲目的に権威主義的な宗教的指導者や政治的指導者に従うことによって、自由からの逃走手段を探す。もちろん、これらの力強い人物たちは、独立的、批判的な思索や意見を放棄することと引き換えに、その追従者たちに、安全と幸せを約束する。不幸にも、20世紀における多くの人々は、この取引にしたがって行動する、とフロムは主張した。」 (Hoffman, 1988, p. 102)

フロムが論じようとしたのは、現代人における自由の意味である。ナチズムを念頭に置きながらも、そこを越えて社会全体に進展しつつある全体主義と、それに対する人間の自由を問題とした。

こうした問題を、彼はまず現代社会の特徴から描き出そうとする。その中で、彼は、人間の本性 (human nature) の欠くことのできない部分について、次のように説明する。すなわち、こうした部分を自己保存の欲求 (a need for self-preservation) と呼び¹⁴⁾、まず、生理的に条件づけられた欲求 (the physiologically conditioned needs) がそれであるとする。それは、単純に言えば、「人は食べ、飲み、眠り、敵から自分を守らねばならない」ということである (Fromm, 1994, p. 16)¹⁵⁾。しかし、いつの時代でも、そのためには、人は仕事をしなければならない。その仕事は、特定の経済システムにおける仕事である。つまり、いつの時代でも、生活様式はその時代の経済システムによってきまることになる。そして、「生活様式が個人に対して経済的システムの特異性によって決定されるとき、その人の性格構造全体を決定する第一次的な要素となる。なぜなら、自己保存に対する避けることのできない欲求は彼をして、彼が生きなければならない状況を受け入れるよう強いるからである」 (Fromm, 1994, p. 16)。

しかし、フロムが言いたいのは、人間の性格構造を決定するのは、生理的に条件づけられた欲求であるということではなかった。彼は、自己保存の欲求として、もう一つのことを挙げる。

14) need の訳について、訳書『自由からの逃走』で、日高六郎教授は「要求」という訳を当てておられる。本稿では、マズロー理論との関係性を見ることに焦点があるため、「欲求」という訳を当てた。basic need が「基本的欲求」と訳されるように、マズローの著作における need の一般的な訳語は「欲求」だからである。もちろん、マズロー理論における need を「欲求」と訳してよいのかどうかという問題も存在しているように思われる。

15) フロムの *Escape from Freedom* の原文については、1994年に出版された Henry Holt and Company 版を参照した。この版は、1941年版の初版とは頁数が異なっていることをお断りしておきたい。また、訳書を参照しているが、訳語は必ずしも訳書に従っていない。

次のように述べている。

「生理的に条件づけられた欲求だけが、人がもつ本性 (man's nature) の中の避けられない部分なのではない。強制的なものとして、別の部分が存在する。それは、身体的な過程を原因とするものではなく、人間の生活様式、生活実践のまさに本質を原因とするものである。それはすなわち、自己の外部の世界と関係づけられたいという欲求、孤独を避けたいという欲求である。完全に孤独であると感じること、孤立していると感じることは、身体的な飢えが死に導くのとまさに同様に、精神的な崩壊 (mental disintegration) に導く」 (Fromm, 1994, p. 17)。

フロムは、このような欲求を「所属の欲求 (the need to belong)」と呼ぶ (Fromm, 1994, p. 19)。そして、この欲求を核にして、以降の議論を展開していく。この所属の欲求を人間が求める理由として、フロムは2点を挙げている。第一に、人は他者との協働なしには生きることができないという事実である。第二は、「主観的な自己意識の事実、つまり、思考力によって、個的な存在としての自分自身、自然や他の人間とは異なるということに人が気づくという事実」である (Fromm, 1994, p. 19)。この第二の点について、フロムは、この気づきの存在は、本質的に人間的な問題に人を直面させるとし、すなわち、「人は、必然的に、世界や〈自分〉以外の他者すべてと比較して、自分の無意味さや卑小さを感じる」と述べるのである (Fromm, 1994, p. 19-20)。

中世までの封建的な社会では、こうした所属の欲求は問題にならなかった。というのは、人々は原始的な結びつきの中に埋め込まれていたからである。しかし、資本主義が発展してくるとともに、「個人化 (individuation)」が進展していく。それは、「個人がその原始的な結びつきから次第に抜け出していく過程」である (Fromm, 1994, p. 24)。この個人化には二つの側面がある。「一つは、子どもが身体的、情緒的、精神的にますます強くなっていくことである。… (中略) …。この組織化され統合されたパーソナリティ全体を自己と呼ぶならば、われわれは、次のように言うこともできる。すなわち、個人化のますます進展していく過程の一つの側面は、自己の力の成長 (the growth of self-strength) である」 (Fromm, 1994, p. 28)。

個人化のいま一つの側面は、「孤独が増大していくことである」 (Fromm, 1994, p. 28)。この後者の意味での個人化の側面において、「自分の個人性 (individuality) を放棄し、孤独感や無力感を克服するために、完全に自分自身を外部世界に没頭させようとする衝動が生まれる」 (Fromm, 1994, p. 29)。以上のことは、二つの種類の「自由」が存在することを意味している。すなわち、有名な「～からの自由 (freedom from)」と「～への自由 (freedom to)」である。フロムは、前者を消極的自由、後者を積極的自由と呼ぶ。

さて、ここで問題となるのは、二つの自由のズレが生じているということである。すなわち、前者の意味における個人化の過程は「自動的に生じる一方で、自己の成長は、数多くの個人的理由、社会的理由によって妨害される。これら二つの傾向のズレが耐え難い孤立感と無力感へと至らせる。そして、このことは、今度は、後で逃亡のメカニズムとして述べられる心理的メカニズムに導く」のである (Fromm, 1994, p. 30)。

では、どのようにして自己の成長は妨害されるのだろうか。それは、フロムによれば、資本主義の高度な発展によってもたらされたものであり、個的な自己 (individual self) が弱められた結果である。個的な自己が弱められてしまう理由は、人間が自己をも手段化してしまう利己

主義に陥ってしまったからである。フロムによれば、この意味での利己主義（selfish）は自愛（self-love）とは異なる。彼によれば、愛とは次のものである。

「愛は、もともと特定の対象によって「もたらされる」ものではない。愛とは、人間の中のなかなか消えない質であり、それはただ、ある「対象・客体（object）」を通じて実現されているにすぎない。憎悪は、破壊を求めるはげしい願望であるのに対して、愛とは、対象を情熱的に肯定することである。愛は、「感情（affect）」ではない。それは、積極的な努力であり、深遠な関係性である。愛することの目的は、愛する対象の幸せ、成長、および自由である。」（Fromm, 1994, p. 114）

自愛とは、このような意味での自分に対する愛である。しかし、利己主義はこうした自愛とは反対のものである（Fromm, 1994, p. 115）。「利己主義は、真の意味での自己に対する肯定や愛の欠如に根をもっている。すなわち、そのあらゆる可能性を有する具体的な人間存在全体に対する肯定や愛が欠如しているのである。…（中略）…。近代人は、自己という最高の主張によって特徴づけられるように見えるが、実際には、その自己は、弱められ、一片の全体的な自己——知力と自制力——へと縮減され、全体的なパーソナリティの他のあらゆる部分は排除されたのである」（Fromm, 1994, p. 116）。

このように自己が弱められた理由として、フロムは大きく二つの理由を挙げている。一つは、資本主義における人間関係の変化である。すなわち、「個人と個人の具体的な関係は、その直接的かつ人間的な性格を失った。そして、お互いを操作（manipulation）し、道具（instrumentality）とみなす精神を帯びてしまった。あらゆる社会的な関係、個人的な関係において、市場の法則が支配的なものとなっている。競争者同士の関係性が相互の無関心に基づいていなければならないのは明らかである。」（Fromm, 1994, p. 118）

このような世界では、人間は自分自身を売らねばならない。自尊（self-esteem）を得られるかどうかは、自分のパーソナリティの成功、つまり人気に依存する。したがって、近代人にとって、人気は恐ろしいまでに重要性をもつことになった（Fromm, 1994, pp. 119-120）。

自己が弱められたもう一つの理由は、資本主義の中に巨大な力が出現したことである。特に、フロムは、独占資本の力の増大を指摘している（Fromm, 1994, p. 123）。こうした力の出現によって、中小規模の実業家は、不安と無力さを感じ、ホワイトカラー労働者、肉体労働者は巨大な経済的機械の一部となって歯車となり、さらには買い手も近代広告の手法によって批判力を奪われてしまったのである。このことは政治的領域でもそのままあてはまる。

このような弱められた自己においては、人は無意味さと無力さを感じる。こうした自己においては、「～からの自由」の重荷に耐えることはできない。こうして人間は自由から逃走し、安易に権威に対して服従することへと駆り立てられることになる。このような状態について、フロムは正常（normal）、健康（healthy）という用語を用いて説明している。

「正常もしくは健康という用語は、二つの方法で定義される。第一は、機能する社会という立場からであり、もし人がその所与の社会で課されている社会的な役割を果たすことができるならば、その人を正常あるいは健康と呼ぶことができる。より具体的には、このことは次のことを意味する。すなわち、その人はその特定の社会において要求されるやり方で仕事をすることができるということであり、さらには、社会の再生産に参加することができるということ、

つまり、家族を養うことができるということである。第二は、個人の立場からであり、健康や正常性を個の成長や幸福の最適条件とみなすものである。」(Fromm, 1994, p. 137)

このような観点からとらえた場合、社会に適応しているからと言って、健康であるとは言えない。それは第一の観点を満たしているにすぎないからである。そこには、思考、感情、意思についての抑圧 (repression) がある。「あらゆる抑圧は、人の本当の自己 (one's real self) のある部分を取り除き、抑圧されている感情に対して偽りの感情を代置することを強要するものである」(Fromm, 1994, p. 199)。こうした抑圧は、思考、感情における「独創性 (originality)」を失わせ¹⁶⁾、「批判能力 (the ability to think critically)」を低下させる。社会に適応しているだけの人間にはこのような意味での不健康さがある。逆に、神経症の人であっても、ある意味では不自由ではないとフロムは言う。なぜなら第一の観点からは不健康でも、第二の観点、人間的な価値 (human values) の観点にはしたがっていると言えるからである。したがって、本当の意味で自由であるためには、この二つの健康の側面のいずれもが満たされている必要がある。

自由からの逃走に至らないために求められるのは、この二つの意味での健康を備えたものであり、言い換えると、「～への自由」、積極的な自由である。フロムは次のように指摘する。

「しかし、服従が孤独と不安を避ける唯一の方法ではない。他の方法が存在する。それは、唯一の生産的な方法であり、コンフリクトが解決しないという結果には終わらない方法である。それは、人と自然に対する自発的な関係性 (spontaneous relationship to man and nature)、つまり、人の個人性を減じることなく個人と世界を結びつける関係性を築くという方法である。この種の関係性——その一番よい表現は愛と生産的な仕事である——は、パーソナリティ全体の統合と強さに根をもち、それゆえ、それは、自己の成長に対して存在する限界がどこにあるかに左右される。」(Fromm, 1994, p. 29)¹⁷⁾

積極的自由を実現するのは、自己の力の成長である。そのとき、成長とは何を意味するのか。フロムは、人と自然に対する自発的な関係性を築くことができるようになることだと説明する。つまり、単なる孤立的な自己ではなく、外部にある自然、他者との関係性を受け入れるものをパーソナリティ全体の統合と呼び、こうしたパーソナリティ全体の統合を得ることを自己の力の成長と考えるのである¹⁸⁾。フロムは、こうした自己の力の成長を「自己の実現 (realization of the self, self-realization)」と呼ぶ。

「自己の実現とは何か。… (中略) …。われわれは、自己の実現は、考えるという活動によっ

16) なお、フロムの言う「独創性」は日本語のいわゆる「独創」の意味とは異なる。次のような意味である。「繰り返しになるが、私が独創的という語によって意味しているのは、ある考えが以前に他の誰によっても考えられてこなかったということではない。そうではなく、考えが個人に始まる (originate) ということ、つまり、考えがその人自身の活動の結果であり、この意味で、その人の思考であるということである。」(Fromm, 1994, p. 241)

17) spontaneous は、フロムの積極的自由を説明する鍵概念となっている。しかし、日本語にすることがきわめて難しい。訳書では「自発的」とされている。日本語の「自発的」という表現は、一般には「人の意図」が存在することを感じさせるが、ここでの spontaneous は、そのような意味ではない。物事の根本から自然に生まれてくることを指している。本稿では、それ自体の中から「自 (おの) ずから発する」という意味で訳書通りの「自発的」という言葉が妥当していると考え、ひとまずこの訳語を用いている。

18) M.P. フォレットが、『新しい国家』(1918年)において、自由の本質は関係の充実さにあると述べたことが想起される (Follett, 1918, p. 69)。

でのみでなく、人のパーソナリティ全体の実現によって、つまりは、その人の情緒的潜在力、知的潜在力を積極的に表現すること（active expression）によってもまた成し遂げられると信じる。これらの可能性は、すべての人に存在する。これらの可能性は、それらが表現される程度に応じてのみ本物となる。言い換えると、積極的な自由は、全体的な、統合されたパーソナリティの自発的な活動（spontaneous activity）に本質があるのである。」（Fromm, 1994, pp. 256-257）

この統合されたパーソナリティの自発的な活動についてフロムはさらに次のような説明を加える。

「自発的な活動とは、自己の自由な活動であり、心理学的には、その後のラテン語の語源、sponte がその文字通り意味していること、つまり、人の自由意思を意味している。…（中略）…この自発性の一つの前提は、パーソナリティ全体の受容（the acceptance of the total personality）であり、「理性（reason）」と「自然（nature）」の間にある分裂を取り除くことである。というのは、人は、その自己の本質的部分を抑圧することのない場合にのみ、その人が自分自身に率直になれた場合にのみ、人生の様々な領域が根本的な統合に達した場合にのみ、自発的な活動が可能となるからである。」（Fromm, 1994, p. 257）

さらに、フロムは、こうした自己の実現、自発的な活動が、なぜ自由なのかということに答えようとする。

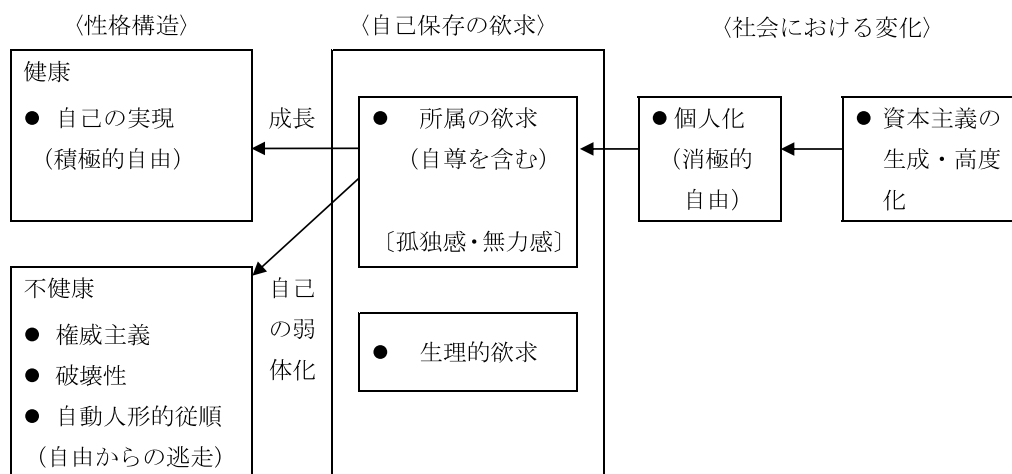
「なぜ自発的な活動が自由の問題の答えなのだろうか。…（中略）…。自発的な活動は、人がその自己の誠実さ（the integrity of his self）を犠牲にすることなく、孤独の恐怖を克服しうる一つの方法である。というのは、自己の自発的な実現は、その人自身と世界とを——人間、自然、その人自身とを——再び結びつけるからである。」（Fromm, 1994, p. 259）

フロムの自由論は以上のようなものである。フロムには『自由からの逃走』の後にも様々な著作があるが、それらは基本的に、『自由からの逃走』で示された人間の不健康さの側面や、逆に人間の健康、自己の実現、積極的自由の側面について、より突っ込んだ議論を展開したものと理解できる。この意味で、最も根本的な部分の考え方は、『自由からの逃走』において示されていると考えることができるであろう。

以上のような積極的自由の得られていない状態をフロムは不健康であると考えたが、その心理的メカニズムとして彼は、権威主義（Authoritarianism）、破壊性（Destructiveness）、自動人形的従順（Automaton Conformity）の3つを挙げた。このうち前2者はナチズムが利用した心理的メカニズムであるが、最後の自動人形的従順は、ナチズムではなく、現代の一般の問題としてフロムが提起したものである。

以上のフロムの自由論の議論を図示すると、図表4となる。

図表4：フロム『自由からの逃走』における自由論の枠組み



(出所) Fromm (1994) より筆者作成

4. フロムの自由論から見たマズロー自己実現論の意味

それでは、以上のフロムの自由論とマズローの自己実現論との関係性を見ていこう。興味深いのは、フロムの自由論がマズロー理論と次のような非常に重要な点で符合を見せるということである。

第一に、両者は、いわゆる心理学であるが、単に個人を分析したのではなく、社会に対する明確な問題意識をもって個人を分析しているということである。すなわち、フロムでは、社会が全体主義に流れてしまったのはなぜかという問題意識の下に個人が分析され、マズローは、社会の没価値性に対する危機感をもち、したがって、いかにして諸個人の心理的健康を育むかという問題意識をもって個人を分析したのである。

第二に、フロムが論じる自由の問題とマズローの論じる自己実現の問題はいずれも、人間の健康・不健康の問題として把握されている。すなわち、両者とも、健康に二つの側面があり、社会の立場からの側面と個人の立場からの側面があると把握されている。フロムは、このうち、二つの側面いずれの意味においても健康なのは、積極的自由に向かう個人であり、消極的自由から逃走する個人は、社会には適応しているかもしれないが、個人には適応していないという意味で、不健康と把握した。後者の個人には批判力が欠如しているからである。これに対して、マズローは、その欲求階層説の存在が示しているように、人々を心理的に不健康な状態からどう心理的に健康な状態へ引き上げるかを問題とした。

第三に、両者は、人間の基本的な、避けることのできない欲求についての認識がほぼ等しい(図表5)。まずフロムは、生理的に条件づけられた欲求、所属の欲求を人間の本性の欠くことのできない部分と把握している。このうち、生理的に条件づけられた欲求には、「人は食べ、飲み、眠り、敵から自分を守らねばならない」とされているように、マズローの言う「安全の欲求」が含まれている。また、所属の欲求は、単に他の人と結びつきたいということ以外に、

本質的に人間的な問題として、自己を自然や他者と比較するという問題、卑小さ・無意味さを感じるという問題を挙げている。これは、別の箇所では「自尊」の問題として取り上げられることになったものである。したがって、フロムにおいては、自己実現の欲求を除けば、マズローのいう基本的欲求が人間の欠くことのできない欲求として捉えられていると言える。

図表5：フロムの「自己保存の欲求」とマズローの「基本的欲求」

フロム	マズロー
自己の実現 ^{※)}	自己実現の欲求
所属の欲求	承認の欲求
	所属と愛の欲求
生理的に条件づけられた欲求	安全の欲求
	生理的欲求

※) ただし、フロムの「自己の実現」は「欲求」ではない。
 (出所) 筆者作成

第四に、性格構造には、欲求

(need) が寄与しているという考え方である。フロムは、上記の意味における生理的に条件づけられた欲求、所属の欲求が性格構造を決める第一次的な要素であるとした。これに対して、マズローも、5つの基本的欲求のうちどの欲求が優勢であるかが、その人がどのような認知・関心・価値等をもつかを左右すると考えていた。マズローの場合は、それゆえに、欲求の階層が心理的な健康の度合いを示すという考え方と結びつくのである。

第五に、フロムの言う自己の実現 (self-realization) とマズローの言う自己実現 (self-actualization) の概念の内容は非常に近い。もちろん、self-realization と self-actualization は必ずしも同じ意味の言葉ではない。しかし、両者が述べたその中身を見ると、述べていることは本質的に同じものだと考えられるのである。フロムは、自己の実現を「全体的な統合されたパーソナリティの活動」とし、そのため、この自己の実現には「パーソナリティ全体の受容」が必要だとしているが、マズローも自己実現の一つの特徴として自己・他者・自然の受容を挙げている。そして、フロムは自己の実現について、「理性」と「自然」の分裂を取り除くことであり、このことは、その人自身を世界と一つにすることだと述べているが、それはまさに、マズローの言う存在認識そのものであろう。さらに付言すれば、フロムは、自己の実現は理想であって、現実の人間がこの段階に至っているということではないと述べているが、マズローも、ほとんどの人間が自己実現に至っていないと述べているのである。

もちろん、フロムの理論とマズローの理論には違いも存在する。

第一に、マズローは、フロムが「生理的に条件づけられた欲求」と呼んだものを、「生理的欲求」と「安全の欲求」に分け、「所属の欲求」と呼んだものを「所属と愛の欲求」と「承認の欲求」に分けている¹⁹⁾。その際、マズロー欲求階層説は、文字通り、欲求間に階層を設け、そして、自己実現の欲求に焦点を合わせているが、フロムは欲求間に階層があるとは考えていないし、また、焦点も所属の欲求 (承認を含んだ) にある。

19) マズローは、かなりはっきり愛と尊敬は分けることができると考えていたようである。

「愛と尊敬は分けることができる。それらが、多くの場合で同時に生じているとしてもである。… (中略) …。愛の関係性の側面もしくは属性と考えられる性格の多くが、非常に頻繁に、尊敬関係の属性とみなされてしまっている。」(Maslow, 1954, p. 253)

第二に、マズローと違い、フロムは、自己の実現を「欲求 (need)」であるとは考えていない。第三に、このことと関連して、フロムには、欲求充足によって人間性が向上する、心理的健康に向かうという発想はない。したがって、生理的欲求、所属の欲求が性格構造を決定する要素であるという考え方は同じであっても、それらを充足することが積極的自由への道であるという論理にはなっていない。フロムが指摘したのは、愛と生産的な仕事であり、与えられるのではなく、自ら行動することに積極的自由への道を見ていたと言える。

以上の相違は、両者の理論全体における相違というよりも、欲求階層説を採っているか否かの相違であると言える。それは、目的の相違ではなく、手段の理解に関する相違である。さらに言うと、それらは考え方が相違しているというよりも、考え方を共有しつつ、その延長線上で、手段の側面についてマズローが理論を付け加えたものであると言い換えることもできる。フロムの言う愛と生産的な仕事の重要性は、マズローも認めるところだからである。したがって、この違いは、フロムの理論に対するマズロー理論の関係性を示すものである。すなわち、マズロー理論とは、フロムの段階では十分に触れられていなかった自己の実現の内容をより豊かに詳細に明らかにし、またそこに至る手段の考え方として欲求階層説を新たに提示したものだということができる。

以上のことから、フロムの理論とマズロー理論は、基本的な理論構造を共有していると言える。では、そうだとすれば、マズロー理論の現代社会における位置づけについて、どのようなことが言えるだろうか。

まず、マズローの自己実現論は、まさにフロムの言う「消極的」自由ではなく「積極的」自由について論じたものだと言える。こうした積極的自由を実現する方途として、フロムは愛と生産的な仕事を挙げたが、その代わりにマズローは主として欲求階層説を提示したということである。フロムが問題にしたのは、全体主義であった。自由からの逃走が意味するのはそれである。この問題の背後には、組織を全体主義的に組織するか、積極的自由の下に組織するのかという問いがあると言える。組織が全体主義に陥るかどうかは組織論においてきわめて重要な問題である。かつて、官僚制が組織論において問題になった一つの理由は、こうした全体主義に至る心性、人々の批判力の低下であったと言える。官僚制を理論化した M. ウェーバーは、官僚制が「精神なき専門人、心情なき享楽人」を生むとしているからである²⁰⁾。フロムの理論は、こうした問題に心理学の立場から応えようとしたものと言える。事実、フロムが自由から逃走するメカニズムの一つとしてあげた「自動人形的従順」は、ナチス以外の現代社会全体に投げかけられた問題であった。そして、このことから、マズローの自己実現論もこうした問題に応えようとした理論だということと言える。

すなわち、マズローにおける自己実現とは、一個人の心理的な問題ではなく、社会的な問題である。フロムは、諸個人が所属の欲求に流されて心理的に不健康な状態に陥り、その結果、全体主義に追従してしまうという社会的な問題が生起することを論じ、マズローは、現代社会を無価値状態であると把握し、この問題に応えるべく、人間の基本的欲求を満たすことが諸個

20) ウェーバーの官僚制の問題には、「逆機能性」の問題とともに「抑圧性」の問題がある(三戸、1987)。フロムの議論は、「抑圧性」の問題に応えようとするものであるし、マズローもそうであると考えられる。

人を心理的健康に導き、存在認識、存在価値、総合力に根ざしたすぐれた意思決定が可能な人々を生み出すことで健全な社会を実現しようとしたのである。

マズロー理論の現代的な意義は、今日、あまり認められているとは言えない。今は、低次欲求が充足され、高次欲求に注目すべき時代と言われて久しく、マズロー理論が注目されて以来50年以上もこのように言われつづけているが、確かに、もし、それが事実であるとすれば、マズロー欲求階層説の現代的意義は半減する。この場合、自己実現＝心理的健康をどのように実現するかという問いは必要でないこととなり、残る問題はそうした自己実現的人間をどう動機づけるかだけとなるからである。そして、自己実現的人間を外部から動機づけることについてマズローは、ほぼ語っていない²¹⁾。

ただし、経営学において、現代人の多くが自己実現の段階に達していると理解している論者はいまや少ないと言っていい。むしろ、現代人において充足されていないのは、あるいは、動機づけの要因としてまだまだ機能するのは、自己実現欲求より一つ低次の欲求の「承認の欲求」であるとして、この欲求を重視する流れがある（沼上、2003；太田、2005、2007、etc.）。マズロー自身も、承認の欲求については重視していた（e. g. Maslow, 1965）。もちろん、「承認欲求を重視すべし」という主張をもって、マズロー理論の意義を語ることはできないであろうし、事実、この立場からマズロー理論の意義が語られたことはない。

しかし、注意しなければならないのは、マズローは、自己実現的人間が現実の世の中にはそれほど多く存在していないことをよく知っていたということである。その上で、あの膨大な自己実現研究を行っているのである。つまり、彼は自己実現している人が多いから自己実現を研究していたのでは元々ないのである。したがって、現実的に数が少ないという理由でもって、マズローが一番重視し、研究してきたことを脇におくわけにはいかないであろう。

もう一度、マズロー理論の原点に立ち返る必要がある。それは、繰り返しになるが、マズロー理論とは、自己実現＝心理的健康の実現を論じようとした理論だということである。マズローがこの問題を理論化しようとしたのは、自己実現している人が多いからではなく、社会的に見て諸個人が心理的健康を育てていく必要があると考えたからであり、そこに社会の命運がかかっていると考えたからである。そして、先述のとおり、フロムもこの心理的健康を実現するという立場から議論をしている。重要なことは、マズローは、基本的欲求の充足が心理的健康につながると考えていたが、基本的欲求といえどもその欲求の充足がいつでも心理的健康につながるわけではない。マズローが後年になって欲求充足の病理に言及することとなったのは、そのことを踏まえていたからである。そして、この欲求充足が即心理的健康に結びつくわけではないことをよりはっきり示したのが、フロムの議論である。

フロムの議論は、所属の欲求を充足させることをめぐる問題をはっきりと示している。現代は一面において、「所属の欲求」は満たしていると言えるかもしれない。実際には、以前に比べて、所属の欲求を満たしているとは言い難い時代に現代はなりつつある。しかし、仮に所属の欲求を満たしているとしても、問題は、ただ「所属の欲求」を満たせばよいわけではないと

21) この意味で、金井壽宏教授がすでに指摘されている通り、マズロー理論において自己実現は動機づけの問題ではない（金井、2001）。さらに、あえて付言すれば、低次欲求についても、マズローがそれを動機づけという観点から論じた箇所はほぼ存在しない。

いうことである。それがフロムの『自由からの逃走』でなされた示唆である。フロムは、所属の欲求を、人間の生活様式の本質に根をもつものと論じている。この欲求は、自己と世界の結びつきを与えるものとしてきわめて根本的なものである。それゆえに、人間は、この欲求に振り回される。それが、人が全体主義へと向かった一つの動機である。

フロムは、人間が個人化の進展とともに自由となるが、孤独も増大するとした。この場合、二つの可能性が示唆される。すなわち、第一に、個的な自己が弱体化することで、人は自由に耐えきれなくなって、その自由から逃走する。つまり、全体主義に走るということである。こうした事態に至らないための第二の道は、自己の力を成長させるという道であり、個々人が自発性を手にし、積極的自由の下で行為するということである。フロムは、愛と生産的な仕事にその解を求めた。このフロムの指摘は、「所属の欲求」はただ満たせばよいわけではないということの意味している。全体主義へと進むことも、諸個人の所属の欲求を満たす道だからである。したがって、どのように満たすかがきわめて重要だということになる。

マズローは、1940年代にフロムの議論に共感していたのは先述のとおりである。フロムの議論に共感し、研究していたマズローは、この所属の欲求をめぐる問題をはっきり意識していたと考えるのが自然である。それが単に「所属の欲求」ではなく、「愛」も付け加えた理由であったと考えられる。なぜなら、マズロー欲求階層説は、その欲求の充足によって、より高次の欲求の発現を意味すると同時に、それが心理的健康に近づくことを意味しなければならなかったからである。マズロー理論の本旨からすれば、欲求の充足が、積極的自由に向かうのではなく、消極的自由からの逃走を意味するとすれば本末転倒であるし、単に「所属の欲求」としてしまえば、その可能性はきわめて高い。所属の欲求を充足しようと思えば、自由から逃走することの方がはるかに容易だからである。このことを、フロムの理論を研究していたマズローが意識しなかったとは思えない。「所属と愛の欲求」とすることによって、それを充足するためのハードルは上がるが、どのような所属の欲求の充足でなければならぬかをはっきり示すことができる。すなわち、「愛」を伴うということである。「愛」は、フロムによって、生産的な仕事とともに自己を成長させるときに必要な行動として挙げられたものである。この意味では、この「所属と愛」の欲求が「社会的 (social)」という表現に変えられて流布されているのは大きな問題ではないかと思われる。

興味深いのは、マズローが「愛」について語るとき、特に重要な箇所では、フロムの著作を引用しているということである。例えば、『人間における自由 (Man for Himself)』からではあるが、次の点が引用される (Maslow, 1954, p. 249)。

「愛とは、原理的に、〈対象・客体〉とその人の有する自己の間の結びつきが関係している限りは、分けることのできないものである。本物の愛とは、生産性の表現であり、配慮、尊敬、責任、そして理解である。それは、誰かによって影響されるという意味での「感情 (affect)」ではなく、愛される人間の成長と幸福のための積極的な努力であり、その人の愛する能力に根をもつものである。」 (Fromm, 1947, pp. 129-130)

また、『自由からの逃走』から次のような引用をしている (Maslow, 1954, p. 252)。

「愛は、そのような自発性の最も重要な構成要素である。それは、別の人間における自己を崩壊させるものとしての愛ではない。それは、他者の自発的な肯定としての愛であり、個的な

自己の保存を基礎としつつ、個を他者と一つにするものとしての愛である」(Fromm, 1941, p.261 ; 1994, p. 259)。

マズローは、所属と愛の欲求について語る時、「愛を与えること、そして愛を受け入れること」の両方を視野に入れて語っている。フロムは、主として、前者の愛について語っているであり、それは、他者に対する自発的な、つまり自ずから発する肯定、マズローの言葉で言い換えるなら、存在認識に根ざした肯定である。所属と愛の欲求の段階を抜けるということは、このような愛を受け取ること、もしくは与えることを含んでいなければならないということである。

さて、このように考えてくると、問題は、このような形の所属と愛の欲求が現代において満たされていると言えるのかということである。この問いに対する一つの答えは、現代において、人間がどのように扱われているかを見るのが一つの答えになると思われる。現代において、人間は、人的資源と把握され、労務管理論、人的資源管理論、戦略的資源管理論と展開する中で、ますます資源として社会に適応しなければならなくなっている。現実の動向として、非正規雇用がますます拡大し、あらゆるものが法・規則重視、文書重視、数値重視の管理へと進展していつている。マズローやフロムの言うパーソナリティの全体的な肯定は、ますますなされなくなりつつある。これはフロムの言う自己の弱体化をもたらすものであり、自由からの逃走をもたらすものである²²⁾。

以上の所属と愛の欲求をめぐる問題は、実は、「承認の欲求」をめぐるものである。まず第一に、フロムは所属の欲求の中に承認の欲求も見出していた。「孤独感」だけでなく「無力感」「無意味さ」にまで言及しているのはそのためである。逆に言うと、所属がなければ承認はないとも言えるし、多くの人々が求めるのは、所属を踏まえた承認だということである。現代は、所属の欲求が満たされなくなりつつある。そのときに、承認の欲求が一番重要だということほどまで言えるかは考える必要があるように思われる。第二に、所属の欲求が自由からの逃走をもたらすと同様に、承認の欲求にも毒がある。かつて、オウム真理教で、頭脳明晰な者たちが、麻原彰晃に従ったのは、まさに「承認」の力であったと言えるだろう。確かに、承認が動機づけとして有効なのははっきりしている。しかし、単に動機づけではなく、心理的健康の実現という問題とセットで考えたとき、承認の欲求を満たすという問題は簡単な問題ではないと思われる。

現代がいまだ所属と愛の欲求を満たしていない時代、承認の欲求を満たしていない時代であるとすれば、諸個人は自己実現欲求の段階に達しておらず、したがって、マズロー理論において展開された自己実現は意味をなさない議論なのだろうか。そうではないと考えられる。例えば、マズローは、「心理的健康は、愛を剥奪されることからよりもむしろ、愛されることから生ずる」と述べている(Maslow, 1954, p. 240)。このことは、つまり、マズローにあって、ある段階の欲求が充足され、より高次の欲求が発現することは、イコール性格形成、心理的健康

22) なお、フロムは1965年に、『自由からの逃走』の二つ目の序文を書いている。その時点では、まだなお自らの論理は通用すると述べている。この段階では、次のように指摘している。すなわち、確かに自由が人間の生来的なものであることを示す事実が多く出てきてはいるが、しかし、原子力エネルギー、サイバネティクス革命、人口爆発という3つの問題が、人間の自由の脅威となっているというのである(Fromm, 1994, pp. xiv-xv)。

に一步近づくことを意味するのである。すなわち、より高次の欲求の発現は、自己実現的人間の能力、すなわち、存在価値、存在認識、統合力をその分、身につけたことを意味するのである。欲求を充足しようとしまいと、何らかの形でこれらの能力を身につけることが高次欲求発現の意味である。

フロムの議論から見えてくることは、現代人に必要とされていることは、自己の力の成長＝自己の実現だということである。そして、マズローの言う自己実現も、フロムが述べた自己の力の成長を実現したものと言える。それは、もちろん、単に個性を磨くとか、他者から独立した存在としての人間を生み出すということではない。それは、他者や世界と一つになった全体としてのパーソナリティを受容する自己を育てるということである。フロムが言うようにこのことは、社会に適応すると同時に、個人に適応しているという意味で健康であり、そうした個人は、マズローの言うように、存在認識、存在価値を有し、統合的意思決定が可能となる。そのとき、どのような手段がありうるだろうか。フロムは、愛と生産的な仕事を挙げ、マズローは欲求階層説、至高経験、責任ある仕事、等を挙げた。

最後に、もう一つ指摘しておきたいことがある。フロムの自己保存の欲求とマズローの基本的欲求がほぼ一致していた点についてである。このことは、マズローが「基本的 (basic)」と述べた一つの意図を示していると思われるからである。フロムは、自己保存の欲求を人間の本性に根ざした欠くべからざるものと捉えている。欲求にはさまざまなものが存在する。その中で5つの欲求を取り上げて、マズローがそれらを「基本的」と銘打ったのは、まさにそれらが人間存在に根ざしているがゆえに、人間にとって欠くべからざる欲求だと考えていたからだと考えられる。

このことは、人間が欲求階層の中のどの段階にあらうとも、それ以下の欲求を満たす必要がなくなるわけではないということの意味している。欲求階層説を用いようとする場合、ともすれば、それぞれの人々がその欲求階層の中のどの段階にいるかだけを問いがちである。もちろん、ある人間が欲求階層のうちのどの段階にいるかということは、動機づけの立場からも、心理的健康を実現するという立場からも重要である。しかし、マズローにおける基本的欲求が人間存在に根ざした欲求であり、フロムの言葉で言えば、人間の本性に根ざした欲求であるとするれば、現代社会がどのような社会であらうとも、諸個人がどの段階にあらうとも、これらの欲求すべてについて、それらを満たす意義がなくなることはなく、いつの時代でも可能な限り満たしていく必要があることになるのである。

5. おわりに

自己実現とは何であろうか。この問題を考えるために、マズロー理論の全体像を概観し、フロムの自由論との対比の中でその現代における意義を確認してきた。自己実現とは、言葉だけからすると、「夢をかなえる」や「自分の目標を達成する」などと理解され、利己的なイメージをもたれることもあるし、あるいは、欲求という観点からは、高次欲求として、動機づけのために重要であると考えられてきた。しかし、「自己実現は動機づけの問題ではない」し(金井、2001)、また、利己的なものでもない。マズローは、自己実現を心理的に最も健康な状態と考え、その心理的健康をいかに実現するかを問題とした。

では、この意味での自己実現とは何を意味しているのだろうか。マズロー理論に即して言えば、それは「すぐれた意思決定者」となることである。それは、存在認識、存在価値に根ざして、さまざまな対立・葛藤を統合していく力をもつことである。それをフロムの言葉で言えば、言うまでもなく、消極的自由ではなく、積極的自由を実現することである。つまり、社会的観点から見て機能的であり、かつ個人的にもコンフリクトを統合していくことが自己実現なのである。

したがって、人々が自己実現するか否かという問題は、個人的な問題ではなく、社会的な問題である。それが、マズローが人間的充実、人間的向上を目的とする心理学に世界が救われるかどうかがかかっていると述べた理由でもある。フロムとの対比から、自己実現は全体主義の克服という問題を背景としてもつということがわかる。すなわち、フロムは、ナチズムの全体主義を超えた現代社会一般にはびこる全体主義の問題を提起したのであり、フロムとマズローの理論の構造的な類似性は、マズローの理論がこうした全体主義の克服という目的をもった理論だということを示唆する。全体主義に内在する問題は、諸個人から批判能力を奪うということであり、批判能力を奪うということは、その人から社会的観点、個人的観念のいずれかあるいは、その両方の観点からするすぐれた意思決定の能力を奪うということである。自己実現の含意は、こうした社会的・個人的観点からするすぐれた意思決定の力を育てる育んでいく、あるいは回復させるということなのであり、この意味において、それは社会的な問題なのである。

こうしたマズロー自己実現論の意義は、現代においても失われていない。もちろん、もし現代社会が、低次欲求が充足され高次欲求を満たしていけばよい社会であるとすれば、心理的健康を実現しようとする、つまり、すぐれた意思決定の力を育んでいこうとするマズロー理論の現代的意義は非常に小さいものとなるが、現代社会はそのような社会とは言えない。それは、まさにフロムが所属の欲求の存在ゆえに人間が自由から逃走したことを描き出しており、所属の欲求から抜け出すことは容易でないからであると同時に、マズローにおける欲求階層説の第三段階が単に「所属の欲求」ではなく、「所属と愛の欲求」だからである。この欲求の存在は、社会の中で諸個人がどのように扱われるべきかを問うものである。そして、近年注目されている承認の欲求は、この所属を踏まえた欲求であり、承認自体も、それを与えることが必ずしも心理的健康に結びつくわけではないということは見逃されてはならないと考えられる。「所属と愛の欲求」を満たすことが容易でなく、事実として人々が人的資源として扱われ、フロムの言う自動人形的従順を強いられる状況にある現代社会において、人々は、今なお、積極的自由としての自己実現を手にはしていない。現代社会は組織社会であり、こうした状況に應えるのは経営学のきわめて重要な課題であると考えられる。その方途を多方面から示したマズロー理論は、現代社会においてきわめて意義を有する理論であり、現代に生かしていくべき理論であると考えられる。

〈参考文献〉

Alderfer, C. P.,(1972) *Existence, Relatedness, and Growth – Human Needs in Organizational Settings*, The Free Press.

- Barnard, C. I.,(1938) *The Functions of the Executive*, Harvard University Press. (山本安次郎・田杉競・飯野春樹訳 (1968) 『[新訳] 経営者の役割』ダイヤモンド社。)
- Campbell, J. P. & R. D. Pritchard,(1976) “Motivation Theory in Industrial and Organizational Psychology,” in Dunnette, M. D.(ed.), *Handbook of Industrial and Organizational Psychology*, John Wiley & Sons, pp. 63-130.
- Follett, M. P.,(1918) *The New State — Group Organization, The Solution of Popular Government*, Longmans, Green and Co. (三戸公監訳、榎本世彦・高澤十四久・上田鷺訳 (1993) 『新しい国家 — 民主的政治の解決としての集団組織論 —』文真堂。)
- Follett, M. P.,(1924) *Creative Experience*, Longmans, Green and Co.
- Follett, M. P., [Metcalf, H. C. & L. F. Urwick (eds.)],(1941) *Dynamic Administration: The Collected Papers of Mary Parker Follet*, Harper & Row, Publishers. (米田清貴・三戸公訳 (1972) 『組織行動の原理』未来社。)
- Fromm, E.,(1941) *Escape From Freedom*, Holt, Rinehart and Winston. (日高六郎訳 (1965) 『自由からの逃走』東京創元社。)
- Fromm, E.,(1947) *Man for Himself*, Holt, Rinehart and Winston. (谷口隆之助・早坂泰次郎訳 (1972) 『人間における自由 (改訳版)』東京創元社。)
- Fromm, E.,(1994) *Escape From Freedom*, Henry Holt and Company. Originally published in 1941 by Holt, Rinehart and Winston.
- Hoffman, E.,(1988) *The Right to be Human*, St. Martin's Press. (上田吉一訳 (1995) 『真実の人間 — アブラハム・マズローの生涯』誠信書房。)
- Kanfer, R.,(1995) “motivation,” in Nicholson, N.(eds.), *The Blackwell Encyclopedic Dictionary of Organizational Behavior*, Blackwell, pp. 330-336.
- Locke, E. A.,(2008) “Motivation,” in Clegg, S. R. & J. R. Bailey(ed.), *International Encyclopedia of Organization Studies*, Sage, pp. 919-926.
- Locke, E. A. & G. P. Latham,(2004) “What Should We Do about Motivation Theory? Six Recommendations for The Twenty-First Century,” *Academy of Management Review*, Vol. 29, No. 3, pp. 388-403.
- Maslow, A. H.,(1954) *Motivation and Personality*, Harper & Row. (小口忠彦監訳 (1971) 『人間の心理学』産能大学出版部。)
- Maslow, A. H.,(1957) “A Philosophy of Psychology,” in Fairchild, J. E.,(ed.), *Personal Problems & Psychological Frontiers*, Sheridan House, pp. 224-244.
- Maslow, A. H.,(1959) “Preface,” in Maslow, A.H.(ed.), *New Knowledge in Human Values*, Harper & Low, pp. vii-x.
- Maslow, A. H.,(1962) *Toward a Psychology of Being*, D. Van Nostrand Company, Inc.
- Maslow, A. H.,(1965) *Eupsychian Management*, Irwin. (原年廣訳 (1967) 『自己実現の経営 — 経営の心理的側面』産業能率大学出版部。)
- Maslow, A. H.,(1968) *Toward a Psychology of Being(2nd ed.)* VanNostrand Reinhold Company. (上田吉一訳 (1998) 『完全なる人間 [第2版] — 魂をめざすもの』誠信書房。)
- Maslow, A. H.,(1970) *Motivation and Personality(2nd ed.)*, Harper & Row. (小口忠彦監訳

- (1987) 『[改訂新版] 人間性の心理学』産能大学出版部。
- Maslow, A. H.,(1971) *The Farther Reaches of Human Nature*, The Viking Press. (上田吉一訳
(1973) 『人間性の最高価値』誠信書房。)
- Robbins, S. P.,(1996) *Organizational Behavior—Concept, Controversies, Applications*(7th ed.), Prentice Hall.
- Simon, H. A.,(1947) *Administrative Behavior—A Study of Decision-Making Processes in Administrative Organization—*, The Free Press. (松田武彦・高柳暁・二村敏子訳 (1965) 『経営行動——経営組織における意思決定プロセスの研究——』ダイヤモンド社。)
- 金井壽宏 (2001) 『完全なる経営』監訳者解説 A・H・マズロー著、金井壽宏監訳、大川修二訳『完全なる経営』日本経済新聞社, 404-428 頁。
- 小此木啓吾編集代表 (2002) 『精神分析事典』岩崎学術出版社。
- 三戸 公 (1987) 「組織理論とビューロクラシー」『組織科学』第 20 巻第 4 号, 33-43 頁。
- 沼上 幹 (2003) 『組織戦略の考え方—企業経営の健全性のために』筑摩書房。
- 野口鐵郎・坂出祥伸・福井文雅・山田利明編 (1994) 『道教事典』平河出版社。
- 太田 肇 (2005) 『認められたい!』日本経済新聞社。
- 太田 肇 (2007) 『承認欲求』東洋経済新報社。
- 田尾雅夫 (1991) 『組織の心理学』有斐閣。
- 山下 剛 (2008) 「Maslow 理論はモチベーション論か—経営学における Maslow 理論の意義再考—」『日本経営学会誌』第 22 号, 66-78 頁。
- 山下 剛 (2011) 「マズローの心理学・科学観」『研究紀要 (高松大学・高松短期大学)』第 54・55 合併号, 231-273 頁。
- 山下 剛 (2012) 「マズローの思想と方法」経営学史学会編〔第 19 輯〕『経営学の思想と方法』文眞堂, 151-162 頁。